早稲田大学大学院日本語教育研究科

２０１２年８月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：日本語教師の成長の再概念化
－日本語教師のライフストーリー研究から－

申請者氏名：飯野　令子

主査　吉岡　英幸　（大学院日本語教育研究科教授）
副査　細川　英雄　（大学院日本語教育研究科教授）
副査　舘岡　洋子　（大学院日本語教育研究科教授）

1．論文の概要

１－１論文の目的

これまでの研究では、「教師の成長」概念は、教師の内省にもとづく認識を変容させることを「成長」とし、一般化してきた。そのため、内省する力や「自己教育力」などの能力を生み出したが、教師が関わる実践の文脈から切り離すことになり、異なる立場の実践に移動すると、現場で軋轢が生じる可能性があった。こうした、「教師の成長」を教師が関わる実践と切り離し、教師個人が認識を変容させたり、ある能力を獲得したりする教師個人の内面の問題として捉える「個体能力主義」を見直す必要がある。多様な立場の教育実践の中を移動する教師の成長を、教師が関わる実践の文脈とともに、教師を取り巻く環境や他者との相互作用･対話にもとづく社会的な関係性の中で、その変容とともに捉えるべきであると考え、本論では教師の成長を、実践の立場間の移動を視野に入れて議論しうるものとして、再概念化することを目的としている。

１－２　論文の構成と内容

1 章では、問題の所在と研究目的について述べている。まず研究の背景として、日本語教育に「教師の成長」概念が登場し、普及した経過を概観し、次に「教師の成長概念」が見落としてきた三つの現状を指摘する。一つ目は、日本語教育の多様な立場の教育実践が混在すること。オーディオリンガル・メソッドを代表とする行動主義の学習観に立つ第一の立場、コミュニカティブ・アプローチを代表とする認知主義の学習観に立つ第二の立場、行動主義や認知主義の学習観及び構成主義を批判的に捉える、社会文化的アプローチの学習観及び社会的構成主義に立つ第三の立場である。二つ目は、このような多様な教育実践が混在する中を移動する日本語教師は、必然的に異なる立場の実践に直面すること。三つ目は、「教師の成長」の捉え方が、それを語る語り手の実践の立場によって、多様であることである。そうした現状を踏まえ、１－１で述べた研究目的を立てるに至った背景について述べている。

2 章では、研究の視座として、日本語教師の成長を捉える視点について述べている。第一の立場にもとづく日本語教師の成長の研究は、教師の資質の研究であり、第二の立場にもとづく研究は、教師の成長過程の研究、成長要因の研究、成長を促す方法の研究、教師の教育観の変容を捉える研究としている。第一の立場も第二の立場も「個体能力主義」にあることを指摘する。第三の立場にもとづく研究は、社会的構成主義

の視点から、クラスというコミュニティや教師・学習者、学習者間の関係性の中で、言語による相互作用・対話を行い、お互いが影響し合うことにより、関係性が変化し、コミュニティが変容し、参加者のアイデンティティの形成・更新などの変容が起こることを学習とする。これまでも第三の立場に立って教師の成長を捉えようとした研究はあるが、一つの実践内での変容を捉えたことに特徴がある。

本論では、移動する学習者の学習を現在関係する複数の実践コミュニティのそれぞれで他者と対話し、それぞれで多様な位置づけをもたらすアイデンティティ交渉を捉えることが学習を捉えることであるとしている。また、教師の移動による実践のアイデンティティの交渉の積み重ねが、教師の実践の立場の変化、日本語クラス、日本語コースという実践コミュニティの発展を促し、それが教師の成長であるとする。そして、その教師の成長は、教師個人のみならず、その教師が関わる実践コミュニティの発展とともに捉えられるとする。

3 章では、研究方法として採用した日本語教師のライフストーリー研究について述べている。まず、日本語教師のライフストーリー研究を採用する意義について述べ、次に本論で行ったライフストーリー・インタビューの具体的な方法について述べている。研究協力者 33 名のうち、5 名の日本語教師のインタビューを分析・考察の対象としている。5 名の教師には実践の立場の変化があったと判断したからであるという。

4 章では 5 名の教師のライフストーリーの記述と解釈を行い、5 章で 5 名の教師のライフヒストリーの横断的な考察を行っている。5 名の教師は、初期実践ではその背後にある学習観を意識化することなく実践を行っているが、移動によって異なる立場の実践に接するときその背後にある学習観も含めて自分の立場を意識化し、異なる実践の立場を理解するようになり、その実践の立場を選択するようになった。そして、その実践の立場の変化は、同時にその教師が形成する実践コミュニティの発展的変容となったという。日本語教師としてのアイデンティティは、教師の実践のアイデンティティを背景に、他者との対話的関係の中で実践されるものであり、またそれは固定的なものでなく常に変容過程にあるものであるとする。

6 章では結論として、5 名の日本語教師の成長過程をモデルとして提示し、それをもとに日本語教師の成長を再概念化している。日本語教師の成長は、異なる実践の立場に接し、自分の立つ実践の立場を意識化し、異なる実践の立場を理解することから始まるとする。実践の立場の認識と理解は、アイデンティティの意識化とその交渉を始

めることであり、教師がコミュニティの参加者と活発に相互作用・対話することは、教師たちが持つ多様な視点から日本語コミュニティに影響を与える。コミュニティに発展をもたらすと同時に、教師の実践のアイデンティティと日本語教師としてのアイデンティティも交渉によって常に見直される。したがって、教師自身の実践設計とその改善のみならず、日本語教育の発展とも結びつくとしている。こうした教師の実践のアイデンティティの交渉過程が、本研究で示す日本語教師の成長であるとしている。さらに、日本語教師の成長の再概念化の意義について、自分の設計した実践にもとづいて、他者との対話をすることが重要であり、実践のアイデンティティにもとづく日本語教師としてのアイデンティティの交渉がなければ個々の実践の発展のみならず日本語教育全体の発展も望めない。個々の実践の発展、日本語教育全体の発展とは、そこで当然視されている価値や考えや規範を見直していくことである。他者とは異なる自分の立場をもとに実践のアイデンティティ及び日本語教師としてのアイデンティティを交渉していくことが真の対話であり、日本語教育の発展のためには、このような教師による個々の実践の立場間の対話が重要であり、教師が実践のアイデンティティと日本語教師としてのアイデンティティを交渉し続けることが重要であるとしている。

２．論文の評価

これまで日本語教育において、「教師の成長」とは、教師自身の内省にもとづく認識の変容であり、この内省や自己教育力などの能力を持つ教師が「成長する教師」と考えられてきた。この概念では、教師の成長は能力の獲得によってもたらされるものであり、それを獲得した場合でも、異なる立場の実践に移動すると、その能力が発揮できなかったり、現場で軋轢を生じる場合などの可能性も考えられる。つまり、これまでの「教師の成長」概念ではこうした異なる立場へ移動する教師の成長を正しく位置づけることができなかった。内省や自己教育力などの能力を持つ教師は、どのような実践にも対応できるはずであり、それぞれの実践現場で教師が対応できない問題は教師の個人の能力の問題であり、「成長」が不十分であるからだと見られ、実践の立場の違いによる「成長」の視点は検討されることがなかった。本研究は、こうしたこれまでの「個体能力主義」から脱却するため、日本語教育を史的に捉えて、その教育概念そのものが推移していることに着目し、それぞれの教師がどのような考え方や立場の変遷をたどったかを丁寧なライフストーリー研究により、教師の成長といわれるもの

が、実際はそうした考え方や立場への意識化であることを論証しようとしたものである。こうした「教師の成長」の捉え方は、従来にない新しい考え方であり、この再概念化の枠組みの構築にはオリジナリティが認められる。

しかし、研究論文として、なお以下のような課題があることを指摘しておく。

1）「多様な立場の実践間を移動する教師」の成長は「教師が関わる実践の文脈とともに教師をとりまく環境や他者との相互作用にもとづく社会的な関係性の中で捉える必要がある」としている。しかし、移動しなくても異なる実践の立場との接触が重要であるはずで、日本語教師でなくても小学校の教師でも適用できるものと考えられる。だとすると、「移動」が必ずしも日本語教育の特徴とはいえないことになる。この概念はどんな分野の教師にもあてはまるものか、日本語教育特有のものなのかということについて論じられていない。

2）被調査者は33名とあり、実際にデータとしてあげられているのは5名にとどまる。このことは、いわゆる「成長」した教師は、この 5 名であり、しかもそのすべての「成長」は同様ではない。本論にも記されているように、この新しい「成長」の概念に当てはめると、ほとんどの教師は、「成長」できていないということになる。そのことが結論であるならば、それはそれで意味があると考えるが、論文の主張として考えた場合、それはなぜかという点についての追及が不十分ではなかろうか。その上で、「日本語教育の発展」とは具体的に何を指すのかを明確にしてほしかった。

3）「立場」とは「考え方」「教育観」のようなものであって、方法ではない。共存することがあるが、第一の立場→第二の立場→第三の立場という流れであって、逆になることはないとしている。日本語教師はすべて第三の立場に行くべきだという立場に立っているようであるが、第三の立場といっても多様であり、第三の立場の中での移動もあるはずである。第三の立場の中でのコンフリクトもあるかもしれない。このような疑問に対する説明が十分されていない。

4）教師の実践にかかわる研究でありながら、実践を見ずに実践の語りのみを取り上げていることに限界はないか。意識的に立場の移動を「語れた人」が「立場間を移動できた人」であり、「成長できた人」であるとする。ライフストーリー研究により、語りから教師の意味づけを知ることができるが、実践を観察し語りと実践との関係をみることができれば、さらにその教師への理解が深まるのではないか。

5）第三の立場の教師研修をどのようにつくるのか。「実践研究」と「ライフストーリ

ー」がその方向性を示すものとしてあげられているが、十分に研修の場については提案できていない。立場の違いについて、教師が自覚的に対話をしていくことが推奨されているが、どのようにしたらそれは可能か、教師研修という場を設けるというところまでいかなくても、日々の実践の中でそれを可能にするにはどうしたらいいかなどについて、今後検討が必要となろう。

6）この「再概念化」により、日本語教育の問題点が浮き彫りになったことは評価できるが、その原因とこれからの具体的な展望についての検討が、今後の大きな課題であろう。

以上のような課題はあるものの、時間をかけた丁寧なインタビューとその分析により、「日本語教師の成長の再概念化」という新しい概念を構築したことは、今後の日本語教師の研修などにも影響を与えるものと考えられ、高く評価できる。よって、博士学位授与に値する論文と判断するものである。